



今や手元にある小さな液晶画面を開けば、多くの情報飛び込んでくる時代だ。即座にお目当ての「答え」が出てくることは、とても便利であり筆者自身もよく使用する。講義中に学生の様子を見ていると、それにはだいぶ依存しているのが分かる。片時も手放すことができないのかな、と感じる時もあるほどだ。しかし、講義においてもそのアイテムを使って調べものさせたり、課題を提出させたりすることもあり、有用なのだ。いずれにしても、

### フィールドワークでの気づき

しまいがちだ。学生が課題解決する際に参考にするのは、ネットに載っている情報ばかりで、それが「正解」と考えているフシがある。「リアル」なものを見ず、画面の中の情報から答えを導き出そうとしてしまっている。

筆者は、文化人類学を専門としており、現地・現場に実際に行くというフィールドワークが欠かせない学問である。「百聞は一見に如（じ）かず」という言葉の真实性を筆者自身、何度も体感している。現在所属しているのは、ビジネス系の学部ではあるが、内容によってこの文化人類学的なフィールドワークを講義に取り入れている。例えば「ま

実践者に案内、解説してもらいながら、現場の人びとも接し、お話をうかがった。また、周辺をゆつくり歩き、まちの様子を観察した。講義室で教員の話を一方的に聞いているだけでは、体験できないことだ。実際にまちを歩いた学生からは、次のような感想を聞くことができた。例えば、話で聞いただけではわからなかった部分を知ることもできた。SNSで写真を見たことはあつたが、実際に行ってみると建物の細部や質感までわかることができた。事前に実践者から話を聞いて、調べるだけでなく情報はずさん得られていたが、それでも直に接見することができてよかった、などである。こうした感想を読むと、彼／彼女らにとつて、現場に足を運ぶ意義を理解できただけでなく、良い経験になったことがわかる。

## 自ら歩く

## 見る、触れる

今の時代では必須といえるだろう。

ただどうしても、そこから得られるものに固執して



愛知淑徳大学 助教授 菅野 淑  
ビジネス

ちづくり」や「ものづくり」に関する講義の時だ。なぜなら実際に現場に行くことなしに、それらが抱える課題について議論することは、机上の空論に他ならないと考えているからだ。

先日、「まちづくり」関連講義で、学生と共に名古屋市内のある施設やその周辺を「まちあるき」した。事前に、協力いただいていた「まちづくり」実践者のお話をうかがって、現場に足を運ぶ。当日はその

結局のところ、何事も現物を見て、直に話を聞いてみなければわからない、見えない部分は大いにある。手元の小さな画面で得る情報が「全て」ではないことを、学生たちには知ってもらいたいと常々思っている。自ら足を運び、そこで直に見聞きしたモノ・コトは、自身の知識となる。体得した知見を元に語れば、言葉は説得力を増し、議論にも深みが出る。他人が書いた情報だけに依（よ）るのではなく、己の見識を広める行動も重視すべきなのだ。

かんの・しゆく、文化人類学、アフリカ地域研究、名古屋大学大学院文学研究科博士課程単位取得後修業期退学。1982年生まれ。